くすり博物館だより

VOL. 58
平成19年(2007)11月

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY

内藤記念くすり博物館
〒501-6195 岐阜県各務原市川島竹早町1
Tel:(0586)89-2101 Fax:(0586)89-2197
http://www.eisai.co.jp/museum/

企画展「薬と秤」開催期間 2007年7月12日(木)～2008年3月30日(日)

企画展の展示資料紹介

開催中の企画展では、度量衡(どりょうこう)を区分して、①長さをはかるための物差し、②容量をはかるための薬匙(さじ)や枡(ます)、ピペットやメスフラスコなどの容量計、③重さをはかるための天秤や分銅など、3つのコーナーに、約400点のはかる道具を展示しています。

度量衡は、明治24年(1891)に、計量の単位や計量器などを定めた法律・度量衡法が制定されて、商取引や公的証明の基準となりました。昭和26年(1951)には、度量衡だけでなく時間・温度・光度・角度・電流など、他の計量単位や計量器なども含めた計量法が制定されました。それ以後は、学術上や法律上の基準が国際的にも一致するようになりました。

元来、桿秤(さおばかり)は取っ手を支点にして棒に吊るしてはかる構造であったが、やがて、より実用的な上皿型増し錘(おもり)式桿秤が普及した。一方、吊るすタイプの天秤から上皿天秤が考案され、特に薬局における調剤などで利用された。

容量のコーナーでは、「匙加減」や「匙を投げる」という言葉の中にも象徴されるように多彩な薬匙を紹介したり、地域や時代によって大きさの違う枡や、液体と穀物類で特徴が異なる枡を紹介しています。ガラス製・磁器製の容量計などは、化学実験で使った方も多いでしょう。

今日ではデジタル式の秤が増えて、この企画展で紹介している秤は過去の遺物のように見えます。しかし、正確に物をはかる～量る・計る・測る～という行為自体は、いつの時代も変らず、大切なことです。展示期間を長くとりましたので、ぜひご覧下さい。

枡の展示コーナー

正方形、円筒形などさまざま。ちなみに、「氷あり⧄」という看板文字などは、枡の中央の弦鉄(げんてつ)(弦掛(げんかけ))をかたどったもの。

医薬と秤

医薬分野では、調合する原料の重さをはかるのに早くから秤が用いられました。薬種問屋などで大量にはかる場合は、大型の千木秤（ちぎばかり）などを使いましたが、往診やその他携帯する必要がある場合は、小型の桿秤（さおばかり）が便利でした。江戸時代の『七十一番職人歌合（しょくにんうたあわせ）』には、薬だけでなく、少量の貴重な物をはかる桿秤（さおばかり）を用いているところが描かれています。

▲『七十一番職人歌合』より
薬売りの図
＜文中読み下し＞御薬なにか御用候　にんじん（=朝鮮人参）、かんざう（甘草もしくは菅草）、けいしん（桂心）候　ぢんも候

▼『七十一番職人歌合』より
綿売りの図
＜文中読み下し＞わためせ（綿召せ）わためせ　しのぶわた候ぞ

▼『七十一番職人歌合』より
薫物（たきもの）売りの図
＜文中読み下し＞ずいぶん（随分）このかう（香）ども　えりととのへ（選り整え）たれば　此ゆうぐれ（夕暮）のしめりにおもしろき

風袋　安政4年（1857）31.5×31.5

軽くてかさばる物は、風袋（ふうたい）にのせてはかりました。風袋は和紙製で、これには補強のための柿渋が塗られています。今でも、袋や容器などの重さを引くことを風袋引きといいますが、この和紙の皿がもともとの形です。風袋そのものの重さは15匁で、はかった値から15匁を引くことによって、のせた物の重さを計算しました。

表面

裏面

匙（さじ）加減

「匙加減ひとつで･･･」という表現は、日常生活でも手加減の意味で用いられてきました。実はこの「匙加減」という言葉は、薬の調合の時に、患者の具合を診察して匙で薬の量を加減することに由来しています。中国からさまざまな文化が伝わりましたが、匙を使う習慣は、食事ではなく医薬の分野で残り、この言葉が生まれました。

左側の写真のように、金属製・木製などさまざまな匙があります。

また、右側の写真のような丸薬を数えて袋に入れるための、丸薬計数匙がありました。これは、用量の数だけ丸薬を一度にすくうことができる便利な匙でした。

より精密に

明治以降は、西洋医学の導入により、化学実験や分析など精密に計量する必要が生じて、感度の高い精密な秤が日本でも製造されるようになりました。薬は生薬中心だった漢方薬から西洋薬へと切り替わっていきました。

天秤
秤量20g：感量0.01g：分銅：10g～ 0.01g
明治33年（1900）　東京･守谷製
（明治41年佐賀県検印証あり）
26.0×22.7×11.5 桿の長さ=14.0、皿の直径=5.4

天秤
秤量50g：感量0.01g
昭和20年～30年代 大阪･白井製
（神戸市医師会検査印あり44年7月まで使用）
32×27.8×17

生活と度量衡

くすり博物館は、日常生活で使われる秤も収蔵しています。生まれて最初に触れる道具の一つは体重計です。象のデザインのものは、こどもの健やかな成長を願ったものでしょうか。籠に乳児を横たえて体重を測定しました。

また書状秤は、クリップではさんだ手紙の重さがわかると同時に、その重さの郵便物の料金もわかるような目盛りがついていて便利でした。現在では、これらの秤はデジタル化されたものに切りかわりました。

デニールとは、主に繊維関係で用いられていますが、糸の太さの単位で、9000メートルの糸の重さをグラムで表したものが1デニールです。450m単位で糸巻（検尺器）を用いて巻き取り、デニール秤（検位衡）で重さをはかりました。数字が大きくなるほど糸は太くなります。

乳児用体重計　両面式
秤量4貫（15kg）：感量10匁（50g）
昭和35～38年頃　大阪･白井製 41×26
文字盤の周囲に象がデザインされています。

デニール秤（検位衡）
秤量 60デニール
明治時代　15×31.5
繊度（綿密度）の単位“デニール”は、東洋の絹が、ローマのデナリウス銀貨の重さで、取り引きされたことに由来します。

糸巻（検尺器）
明治時代　40×39
デニール秤で計るために、あらかじめこの糸巻で450メートルの糸を巻き取ります。

（ツナカワ式）書状参考秤
昭和初期　8.5×5.0
国内便から国際郵便まで、書状を挟んでぶら下げると、郵便法が改正されたメートル法の料金（5厘～34銭）を目盛りが表示します。

図録の値段が変更になりました
2000円→1500円

用語の説明
【秤量】測定できる最大値
【感量】測定可能な最小値

おくすり今昔

配置売薬の薬袋

富山をはじめとする配置売薬の行商人さんは、各家庭に薬を預け、翌年使った分の薬の代金を回収し、不足している薬を補充する方法で薬を販売していました。その薬は“置き薬”と呼ばれていました。

置き薬を家庭で使ってもらうためには、具合が悪くなった時にすぐ取り出せる場所になければなりません。そのために、紙製の配置薬入れに置き薬を入れ、居間の柱などに吊るしておきました。

時代が下ると、たくさんの薬を入れることができる箱型の配置薬入れが普及しました。目立つように赤く塗られた木箱を覚えている方も多いことでしょう。お得意さんには、湿気に強いとされる桐製のものを持参したそうです。後に、紙製のものが広く普及しました。箱型の配置薬入れは、主に居間のタンスの上などに置かれていたようです。

このような袋や箱には、薬やメーカーの名前が色鮮やかに書かれています。また、袋の裏や、箱の後ろには、使った薬をチェックする欄があります。

最近では、家庭よりも企業の救急箱代わりといったイメージが強いように思われます。しかし、このような配置薬入れは、お医者さんや薬屋さんがなかった地域、あるいは交通の不便な土地では、家族の命を預かるものだったといえるでしょう。

学芸員　稲垣裕美

▲配置薬入れ
（奥左から）
■富山･砂田隆盛堂薬房
■大阪･吉田薬局製薬所の薬入れ
（手前左から）
■奈良･きぬや薬舗
■富山･常田井筒屋薬房の薬箱

とぴっくす

■夏休みのこども向けイベントに多数のご参加、ありがとうございました！

【夏休み親子教室】

さお秤作りに58名の参加がありました。今年は企画展で展示中のたくさんの秤を見ることができました。

【わくわく体験】

アイの生葉染め、製薬道具体験、工場見学と錠剤器体験の3コースがほぼ定員いっぱいとなりました。工場見学は特に人数が多く、1コース追加しました。

【植物標本作りと竹細工】

古い植物標本を見た後、自分たちで採集した植物を台紙に貼りました。竹細工では、竹箸を作りました。

■新収蔵資料

新潟市の佐藤薬局は明治時代から代々続いた薬局です。このたび店を閉じることになり、店で使われていた明治～昭和時代の看板、薬業帳簿、ポスター、秤などをご提供いただきました。

◀展示の様子

看板には薬局の名前が入れられている▶

■120万人目の来館達成

120万人目の来館者は、愛知県清洲市の横井峰子様で、清洲市身体障害者福祉協会の研修会でご来館されました。横井様には館長・篠田愛信より『薬用植物画集』（絵画：田畑一作／非売品）とらんびき（複製）、小屏風（白沢と象神／非売品）がプレゼントされました。「来るチャンスがなく、今回研修で来館しました。はじめてきて（120万人目となり）びっくりしました」とお話しされていました。

▲清洲市身体障害者福祉協会の皆様です
前列右より3人目が横井峰子様、その左右が前後賞の堀田智子様と後藤鉱三様です。右端が館長です。

■参加しました

各務原市で開催された「子どもの生活リズム向上全国フォーラム in 岐阜・各務原」(9月24日)に体験コーナーを出展しました。

また、犬山各務原広域観光推進協議会関西地区観光展のため、観光説明会での発表および近鉄上本町駅における観光PR展でパンフレット配布等を行いました

お詫びと訂正

『くすり博物館だより』57号の４ページに間違いがありましたので、お詫びして訂正します。

薬草観察会の開催曜日
（誤）第2土曜 →（正）第2日曜

◆◆資料･図書ご提供者ご芳名◆◆

植松 三十里、河野 亨、佐藤 恵子
佐藤 玄、武田科学振興財団
武田 晴人、土田 泰秀、豊嶋 利雄
中嶋 完、長野 仁、秤屋 健蔵
浜中 修、林 哲、山内 英司
～ありがとうございました～
（敬称略／五十音順）

内藤記念くすり博物館

開　館／9:00～16:00
休　館／月曜日
年末年始（12／28～1／8）
館　長　篠田愛信
学芸員　稲垣裕美（編集担当）
学芸員・司書
野尻佳与子・伊藤恭子
庶　務　森田麻起子
小島敦子（見学受付）
沼田　望（見学受付）
薬用植物園（栽培管理）
苅谷辰行　亀谷芳明　筒木　渡
アドバイザー　逸見誠三郎